

神學者聖イオアンの黙示録

第一章 イイスス ハリストスの黙示、即 神が速に成る可き事を其諸僕に示さん爲に、彼に與へし者なり、彼は其天使を以て之を遣して、其僕イオアンに示せり。ニイオアンは神の言と、イイスス ハリストスの證と、其凡そ見し所の事を以て、證を作せり。三此の預言の言を読み、又之を聞きて、此の中に録されし事を守る者は 福なり、蓋時は近し。四イオアン書してアシヤに在る七教會に達す。願はくは恩寵と平安とは、今在り、先に在りし、後に在らんとする者、及び彼の寶座の前に在る七神、五及び忠信なる證者、死の中より首生せし者、地上の諸王の君たるイイスス ハリストスより、爾等に賜らんことを。願はくは彼、即我等を愛し、其血を以て我等を我が諸罪より洗ひ、六我等を王と爲し、神其父の前に司祭と爲しし者に、光榮と權能とは無窮の世に歸せん、「アミン」。七視よ、彼は雲に乗りて來る、悉くの目は彼を見ん、彼を刺しし者も亦然り、且地の萬族は彼の前に哭かん。誠なる哉、「アミン」。八主曰く、我は「アリア」及び「ラメガ」、始及

び終なり、今在り、先に在りし、後に在らんとする者なり、全能者なり。九我イオアン、爾等の兄弟、及びイイスス ハリストスに於ける患難と國と忍耐とに共に與る者は、神の言、及びイイスス ハリストスの證の爲に、パトモスと名づくる嶋に居りたり。一〇主の日に、我神に在りて、我が後に筮の如き大なる聲を聞けり、云く、我は「アリア」及び「ラメガ」、第一の者及び末の者なり、一一爾の見る所を書に筆して、アシヤに在る諸教會 即 エフェス、スミルナ、ペルガム、フィアデイヤ、サルデイス、フィラデルフィヤ及びラヂキヤに送れ。一二我身を轉じて、我に語りし聲を觀んと欲せり、既に轉ずれば、七の金の燈臺、一三及び七の燈臺の間に、人の子に似たる者あるを見たり。其身には長衣を衣、胸に金の帶を束ね、一四其首髪とは白きこと、皓き羊の毛の如く、雪の如く、其目は火燄の如く、一五其足は精銅に似、爐に焼かるるが如く、其聲は多くの水の聲の如し。一六其右の手に七の星を執り、其口より兩刃の利き劍出でたり、其面は盛に輝く日の如し。一七我彼を見し時、其足下に俯伏せしこと、死せる者の如し。彼は其右の手を我に按せて曰へり、懼るる勿れ、我は第一の者及び

末の者なり、一八 我は生ける者なり、先に死せしことあり、視よ、我生きて無窮の世に在り、「アミン」。我は地獄と死との鑰を持てり。一九 故に爾が見し所の事、及び今有る事と、此の後に在らんとする事を書せ。二〇 爾が我が右の手に見し所の七の星の奥義、及び七の金の燈臺は、左の如し、七の星は七の教會の天使なり、爾が見し所の七の燈臺は七の教會なり。

第二章 エフェソの教會の天使に書して曰へ、其右の手に七の星を執りて、七の金の燈臺の間を歩む者は是くの如く云ふ、二 我は爾の所爲、爾の勞、爾の忍耐、爾が悪人を勝ふる能はざる事、自ら使徒と言ひて實は否らざる者を試みて、其虚誕を露しし事を知る。三 爾は多く勝へたり、忍耐は爾に在り、我が名の爲に勞して倦まざりき。四 然れども我爾に責むべきことあり、是れ爾が初の愛を離れしことなり。五 故に爾何より隕ちしかを憶ひ、悔改して初の行爲を行へ、然らずして、若し爾悔改せずば、我速に爾に來りて、爾の燈臺を其處より移さん。六 然れども爾に取るべきことあり、爾が

ニコライ黨の所爲を惡むことは是なり、我も亦之を惡む。七 耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし、勝つ者には我神の樂園の中に在る生命の樹に由りて食ふを賜はん。八 又スミルナの教會の天使に書して曰へ、第一の者及び末の者、曾死し、今生ける者は是くの如く曰ふ、九 我爾の所爲と、患難と、窮乏とを知る、然れども爾は富める者なり、又彼の自らイウデヤ人なりと言ひて、實は然らず、乃サタナの會を成す者の謗讟を知る。一〇 爾受けんとする苦を懼るる勿れ。視よ、惡魔は爾等の中の者を獄に下さん、爾等の試みられん爲なり、爾等は患難を受けんこと、十日間ならん。死に至るまで忠信なれ、然らば我爾に生命の冕を與へん。二 耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし、勝つ者は第二の死より害を受けざらん。三 又ペルガムの教會の天使に書して曰へ、兩刃の利き劍を有てる者は是くの如く云ふ、三 我爾の所爲、及び爾がサタナの座の在る處に居るを知り、又爾が我の名を執り、我の忠信なる證者アンティパが、爾等の中に、サタナの居る處に殺されたる日に於ても、我の信を棄てざりしを知る。一四 然れども我聊爾に責むべきことあり、蓋爾には彼處にワラワムの教

を執る者あり、彼はワラクに、イズライリの諸子を誘惑に引き
て、偶像に獻げし物を食ひ、又淫を行はしむるを教へたり。一五
是くの如く爾にもニコライ黨の教、我が惡む所の者を執る者
あり。二六 悔改せよ、然らずば、我速に爾に至りて、我が口
の劍を以て彼等と戰はん。一七 耳ある者は神の諸教會に言ふ
所を聞くべし、勝つ者には我祕藏の「マンナ」を與へて食はし
め、又白き石、及び石の上に書されたる新なる名を與へん、之
を受くる者は外に其名を知る者なし。一八 又ファイアテイラの教
會の天使に書して曰へ、神の子、其目を火焰の如く、其足は精銅
に似たる者は、是くの如く言ふ、一九 我爾の所爲と、愛と、服役
と、信と、爾の忍耐と、且爾が後の所爲の前の所爲よりも多
きを知る。二〇 然れども我聊爾に責むべきことあり、蓋爾
は婦イエザワエリ、自ら預言女と言ふ者に、我が諸僕を教へ惑
はして、淫を行ひ、偶像に獻げし物を食はしむるを容す。二一
我彼に其淫行を悔改する時を與へたれども、彼は悔改せざり
き。二三 視よ、我彼を牀に投げん、又彼と與に姦淫する者も、若
し其所爲を悔改せずば、之を大なる患難に投げん。二三 彼の
諸子は、我死を以て之を滅さん、而して諸教會は、我が人の

心腸を鹽察する者なるを知らん、我爾等各人に、其行に循
ひて報いん。二四 然れども我爾等、及び其他ファイアテイラに在
りて、此の教を受けず、所謂サタナの奧祕を知らざる者に言ふ、
我爾等に他の任を負はせざらん、二五 惟有つ所の者を固く執り
て、我が來るに及べ。二六 勝を得て、終に至るまで我が所爲を守
る者は、我彼に異邦民の上に權を與へん、二七 彼は鐵の杖を以て
彼等を牧せん、彼等は陶器の如く碎かれん、我も我が父より受
けし權の如し。二八 且我彼に晨の星を與へん。二九 耳ある者は神
の諸教會に言ふ所を聞くべし。

第三章 一 又サルデイスの教會の天使に書して曰へ、神の七
の神、及び七の星を有つ者は是くの如く言ふ、我爾の所爲を
知る、爾は生ける名ありと雖、死せるなり。二 爾徹醒して、死
に幾き餘情を堅めよ、蓋我爾が所爲の、我が神の前に全備な
るを見ず。三 故に爾は受けし所、聞きし所を思ひ、之を守り
て悔改せよ。若し爾徹醒せずば、我盜の如く爾に至らん、
爾は我が何の時に至るかを知らざらん。四 然れども爾には、
サルデイスに、猶數名其衣を汚さざりし者あり、彼等は白衣に

して我と與に歩まん、蓋之に當る者なり。五 勝つ者は白衣を衣
ん、我其名を生命の書により抹さざらん、又其名を我が父及び彼
の天使等の前に承け認めん。六 耳ある者は神の諸教會に言ふ
所を聞くべし。七 又フィラデルフィヤの教會の天使に書して
曰へ、聖なる者、眞實なる者、ダワイドの鑰を持つ者、開けば闔
す者なく、闔せば闔く者なき者は、是く如く言ふ、八 我爾の所爲
を知る、視よ、我爾の前に門を開けり、能く之を闔す者なし、
蓋爾は僅に力ありて我が言を守り、我が名を棄てざりき。
九 視よ、サタナの會たる、彼の自らイウデヤ人なりと言ひて、
實は然らず、乃 謊る者、視よ、我彼等をして、來りて、爾
の足の前に伏拜せしめ我が爾を愛するを知らしめん。一〇 爾我
が忍耐の言を守りしが故に、我も爾を守りて、地に居る者を
試みん爲に全世界に臨まんとする試煉の時より免れしめん。
二 視よ、我速に來る、爾が有つ所の者を固く執れ、人爾
の冕を奪はざらん爲なり。三 勝つ者は、我彼を我が神の殿に
柱たらしめて彼は復外に出でざらん、我は又我が神の名、及び
我が神の城、即 天より我が神より降る新なるイエルサリムの
名、及び我が新なる名を其上に書さん。一三 耳ある者は神の

諸教會に言ふ所を聞くべし。一四 又ララデイキヤの教會の天
使に書して曰へ、「アミン」たる者、忠信にして眞實なる證者、
神の造化の元始なる者は、是くの如く言ふ、一五 我爾の所爲を知
る、爾は冷やかなるにも非ず、熱きにも非ず、望むらくは爾或
は冷やかに、或は熱からんことを。一六 然れども爾は温くして、
熱きにも非ず、冷やかなるにも非ざるに由りて、我爾を我が口
より吐き出さん。一七 蓋爾は、我富み、財を積み、匱しき所
なしと、言ひて、自ら不幸なる、憐むべく、貧しく、瞽にし
て、裸なるを知らず。一八 我爾に勸む、爾富を得ん爲に、火
に煉りたる金を我より買へ、衣て爾が裸體の羞の露れざらん
爲に、白き衣を買へ、見るを得ん爲に、目の薬を爾の目に抹
れ。一九 我が愛する者は、我之を責め、之を懲す、故に爾熱中
し、且悔改せよ。二〇 視よ、我門の外に立ちて叩く、若し人我
の聲を聞きて、門を開かば、我彼の所に入りて、彼と偕に飲食
せん。二 勝つ者は、我彼をして、我と偕に我が寶座に坐せしめ
ん、我も勝ちて、我が父と偕に其寶座に坐せしが如し。二三 耳
ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし。

第四章 一 此の後、我仰ぎ觀しに、爰に天關けて、先に聞きし所の籐の如く我に語れる聲は日へり、此に上れ、我此より後に成るべき事を爾に示さん。二 我忽神に在りき、視よ、天に寶座は設けられ、寶座の上に坐する者あり。三 此の坐する者は、貌碧玉瑤瑤に似たり、虹は寶座を繞りて、其色葱珩の如し。四 寶座を繞りて、又二十四の寶座あり、此の寶座には、我二十四の長老の坐するを見たり、白き衣を衣、其首に金の冕を戴けり。五 寶座より閃電と迅雷と聲と出でたり、寶座の前に七の燈の燃ゆるあり、即神の七の神なり。六 寶座の前に玻璃の海の水晶に似たるあり、寶座の中及び寶座の周圍に四の生物あり、前にも後にも目滿ちたり。七 第一の生物は獅に似たり、第二の生物は牛に似たり、第三の生物は人の如き面あり、第四の生物は飛ぶ鷲に似たり。八 四の生物は、各周體に六の翼あり、内には、目滿ちたり、日夜息めずして日ふ、聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、主神全能者、先に在りし、今在り、後に在らんとする者よ。九 生物が、寶座に坐する所の無窮の世に生くる者に、光榮と尊貴と感謝とを歸する時、一〇 二十四の長老は寶座に坐する者の前に俯伏し、無窮の世に生くる者を拜し、

其冕を寶座の前に置きて日ふ、二 主よ、爾は光榮と尊貴と權力とを受くるに當れり、蓋爾は萬物を造れり、爾の旨に由りて萬物は存し、且造られたり。

第五章 一 我又寶座に坐する者の右の手に書を執れるを見たり、其内外に書せるあり、七の印を以て封ぜられたり。二 我又有能の天使が大なる聲を以て宣ふるを見たり、曰く、誰か此の書を開き、其印を解くに堪ふる。三 天にも、地にも、地の下にも、誰も此の書を開き、或は之を觀ることを得る者なかりき。四 一も此の書を開きて、之を讀み、或は之を觀るに堪ふる者を得ざりしに因りて、我多く哭けり。五 長老の一人我に言ふ、哭く勿れ、視よ、イウダの支派より出でたる獅、ダワイドの根は、勝を得たり、彼は此の書を開き、其七の印を解くを得るなり。六 我又觀しに、爰に寶座及び四の生物の中、及び長老等の中に、屠られしが如き羔の立てるあり、七の角、及び七の目、即全地に遣されたる神の七の神を有てる者なり。七 彼來りて、寶座に坐する者の右の手より書を取れり。八 其書を取りし時、四の生物、及び二十四の長老は、羔の前に俯伏せり、各琴と香

とを満つる金の鼎とを執り、是諸聖人の祈禱なり、九 乃新なる歌を歌ひて曰ふ、爾は書を取りて、其印を開くに堪へたり、蓋爾は屠られて、己の血を以て、諸族、諸音、諸民、諸國の中より我等を贖ひて、神に歸せしめ、一〇 且我等の神の前に、我等を王及び司祭と爲せり、我等地に王たらんと。一一 我又見且聞きしに、寶座と生物と長老等との周圍に多くの天使にの聲あり、其數は萬萬千千なり、一二 彼等は 大なる聲を以て言へり、屠られたる 羔は權威と、富有と、睿智と、能力と、尊貴と、光榮と、祝讚とを受くるに當れり。一三 我又凡の受造物、天に在り地に在り、地の下に在り、海に在り、及び凡そ其中に在る者の言ふを聞けり、曰く、寶座に坐する者及び、羔に、祝讚と、尊貴と、光榮と、權能とは無窮の世に歸す。一四 四の生物は曰へり、「アミン」。二十四の長老は俯伏して、無窮の世に生くる者を拜せり。

第六章 一 我羔が七の印の第一を開けるを見たり、時に我四の生物の 一が雷の如き聲を以て言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。二 我觀しに、爰に白き馬あり、之に乗れる者弓を執り、

且冕は彼に與へられたり、彼は勝を得たる者として出で、又勝たん爲に出でたり。三 第二の印を開きし時、我第二の生物の言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。四 乃他の馬、色の赤き者出でたり、之に乗れる者には、地より和平を奪ひ、互に相殺さしむる權は與へられ、又彼に大なる刃は與へられたり。五 第三の印を開きし時、我第三の生物の言ふを聞けり、曰く來りて觀よ。我觀しに、爰に玄き馬あり、之に乗れる者は其手に權衡を執り。六 我四の生物の中に聲あるを聞けり、曰く、銀一枚に麥一量、銀一枚に麩麥三量なり、油と酒とを傷ふ勿れ。七 第四の印を開きし時、我第四の生物の言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。八 我觀しに、爰に灰色の馬あり、之に乗れる者は其名を死と曰ふ、地獄は其後に隨へり、彼に地の四分の一に權は與へられたり、刀劍と、饑饉と、疫病と、地の獸とを以て殺さん爲なり。九 第五の印を開きし時、我祭壇の下に於て、神の言の爲、及び立てし所の證の爲に殺されたる者の靈を見たり。一〇 彼等は 大なる聲を以て呼びて曰へり、聖にして眞實なる主宰よ、爾は何の時に至るまで審判せず、地に居る者に、我等の血の爲に報を爲さざるか。一一 即彼等各人に白き衣は與へら

れ、且彼等に言はれたり、尙少時安んじて、其同勞者及び兄弟が、彼等の如くに殺されて、其數を盈たすに至るべし。二三 第六の印を開きし時、我觀しに、爰に大なる地震あり、日は毛衣の如く黒くなり、月は血の如くなれり。二三 天の星は地に隕ちしこと、無花果樹の大なる風に揺られて、其未だ熟せざる果を落すが如し。一四 天は逝きしこと書卷を捲くが如く、山と嶋と皆移りて、其處を離れたり。一五 地の帝王と、候伯と、富める人と、千夫長と、勇士と、凡その奴僕と、凡その自主の者とは、洞及び山の巖に匿れ、一六 山と巖とに言ふ、我等の上に墜ちて、我等を寶座に坐する者の面、及び羔の怒より匿せよ、一七 蓋其怒の大なる日至れり、孰か能く立たん。

第七章 一 此の後、我四の天使が地の四隅に立ち、地の四の風を執りて、地にも、海にも、凡の樹にも、風を吹かしめざるを見たり。二 又他の天使が、日の出づる方より上りて、活ける神の印を有てるを見たり。彼は 大なる聲を以て、地と海とを傷ふ權の與へられたる四の天使に呼びて曰へり、三 我等が我が神の諸僕の額に印するに至るまで、地をも、海をも、樹をも傷ふ勿

れ。四 且我印せられし者の數を聞きしに、イズライリの諸子の諸支派の中より印せられし者一百四十四千ありき。五 イウダの支派より十二千印せられ、ルワイムの支派より十二千印せられ、ガドの支派より十二千印せられ、六 アシルの支派より十二千印せられ、ネファリムの支派より十二千印せられ、マナツシヤの支派より十二千印せられ、七 シメランの支派より十二千印せられ、レワイイの支派より十二千印せられ、イツサハルの支派より十二千印せられ、八 ザワウロンの支派より十二千印せられ、イオシフの支派より十二千印せられ、ウェニアミンの支派より十二千印せられたり。九 此の後我觀しに、爰に誰も數ふる能はざりし大衆、諸國、諸族、諸民、諸音よりする者は寶座及び羔の前に立ち、白き衣を衣、其手に棕櫚の枝を執り、一〇 大なる聲を以て呼びて曰へり、救は寶座に坐する我等の神及び羔に在り。二 悉くの天使は寶座と、長老等と、四の生物との周圍に立ち、寶座の前に俯伏し、神を拜して、三 曰へり、「アミン」、願はくは祝讚と、光榮と睿智と、感謝と、尊貴と、權威と、能力とは、我等の神に無窮の世に歸せん、「アミン」。二三 時に長老の一人我に問ひて曰へり、此の白き衣を衣たる者は誰ぞ、且何

より來りしか。一四 我對へて曰へり、主よ、爾之を知る。彼我に言へり、此れ大なる患難より來りし者なり、彼等は羔の血を以て、己の衣を滌ひて、之を白くせり。一五 故に彼等は神の寶座の前に在り、其殿に於て日夜彼に奉事す、寶座に坐する者は彼等の中に居らん。一六 彼等は復飢えず、復渴かず、火と凡の熱とは彼等を侵さざらん、一七 蓋寶座の中に在る羔は彼等を牧し、彼等を活ける水の泉に導かん、且神は悉く其涙を其目より拭はん。

第八章 一 第七の印を開きし時、天靜なりしこと約半時。二 我七の天使が神の前に立てるを見たり、七の籬は彼等に與へられたり。三 又他の天使來りて、祭壇の前に立ち、金の香爐を持てり、多くの香は彼に與へられたり、彼が之を悉くの聖人の祈禱と偕に、寶座の前に在る金の祭壇の上に獻げん爲なり。四 香の烟は諸聖人の祈禱と偕に、天使の手より神の前に升れり。五 天使は香爐を執り、之に祭壇の火を盛りて、地に投げたるに、衆くの聲と、迅雷と、閃電と、地震とは起れり。六 七の籬を持てる七の天使は之を吹く備へを爲せり。七 第一の天使籬を吹

きたるに、雹と火とは血に雜りて、雨りて血に隕ちたり、樹の三分の一は焚け、青き草も悉く焚けたり。八 第二の天使籬吹きたるに、大なる山の如き者火に燃えて、九 海に投ぜられたり、海の三分の一は血と爲り、海に在る生ける物の三分の一は死し、舟の三分の一は滅びたり。一〇 第三の天使籬を吹きたるに、大なる星は燈の如くに燃えて、天より隕ち、河の三分の一及び水の泉に隕ちたり。二 星の名を茵蔯と曰ふ、水の三分の一は茵蔯の如く爲れり、多くの人は水に因りて死せり、其苦くなりたる故なり。三 第四の天使籬を吹きたるに、日の三分の一、月の三分の一、星の三分の一は撃たれて、其三分の一は暗くなりたり、晝の三分の一は光なし、夜も亦然り。三 我又一の天使が、中天を飛びて、大なる聲を以て言ふを見且聞けり、曰く、世の三の天使が吹かんとする籬の聲に因りて、地に居る者は禍なる哉、禍なる哉、禍なる哉。

第九章 一 第五の天使籬を吹きたるに、我星の天より地に隕ちたるを見たり、淵の抗の鑰は彼に與へられたり。二 彼淵の抗を啓きしに、抗より烟上れり、洪なる爐の烟の如し、日と空氣と

は抗の烟に因りて暗くなれり。三 烟より蝗は地に出でたり、
之に權の與へられしこと、地の蠍にある權の如し。四 又之に地
の草と、凡の縁と、凡の樹とを傷ふ勿く、第其額に神の印
なき人のみを傷ふべきを命ぜられたり。五 且之に彼等を殺すこ
と勿く、第五月間苦しむるを許されたり、其苦は蠍が人を螫
す時の苦の如し。六 其日人人死を求むとも、之を得ざらん、死
せんと望むとも、死は彼等より遁れん。七 蝗の状は戦に備
へられたる馬の如し、其首に金に似たる冕の如き者あり、
其面は人の面の如し。八 其髪は女の髪のかみの如く、其齒は獅の如
し。九 其甲は鐵の甲の如く、其翼の聲は、多くの馬が戦に馳
せて、引く所の車の聲の如し。一〇 其尾は蠍の如し、尾に蠶
あり、其權は五月間人人を傷ふなり。一一 其王は淵の死者なり、
彼の名は、エウレイの言にてはアワツドンと曰ひ、エルリンの
ことば
言にてはアポルリヤンと曰ふ。一二 一の禍は去りて、視よ、
其後尚二の禍は來る。一三 第六の天使籬を吹きたるに、我は
神の前に在る金の祭壇の、四の角より出づる一の聲が、一四 籬
を持てる第六の天使に言ひしを聞けり、曰く、大なる河エフラ
トの邊に繋がれたる四の天使を釋け。一五 乃四の天使は釋か

れたり、是れ一時、一日、一月、一年間に、人人の三分の一を殺
さん爲に備へられたる者なり。一六 騎軍の數は二萬萬あり、我
其數を聞けり。一七 是くの如く我異象に於て馬と之に乗れる者
とを見たり、彼等の甲は火と紫石と、硫磺との如し、馬の首
は獅の首の如く、口より火と、烟と、硫磺と出でたり。一八 斯
くの三者は、即其口より出づる火と、烟と、硫磺とに由り
て、人人の三分の一は殺されたり。一九 蓋馬の勢は其口及び
其尾に有りき、其尾は蛇に似て、首あり、之を以て傷を爲せ
り。二〇 其餘の人、此の災に殺されざりし者は、猶其手の所爲
を悔改せずして、魔鬼及び金銀銅石木の偶像、見ること、聞く
こと、行くこと能はざる者を拜するを止めざりき、二一 又其兇
殺、其魔術、其淫行、其盜竊を悔改せざりき。

第十章 一 我又有能なる他の天使の、雲を衣て天より降るを見
たり、其首の上に虹あり、其面は日の如く、其足は火の柱の如
し。二 其手には披きたる小巻を持てり、其右の足を海に、左
の足を地に立てたり。三 彼大なる聲を以て獅の吼ゆるが如く呼
べり、彼が呼びし時、七の雷は、其聲を以て語れり。四 七

の雷が其聲を以て語りし時、我之を書さんと欲せり、然れども天より我に言ふ聲を聞けり、曰く、七の雷の語りしことは、之を封じて、書す勿れ。五我が見し所の海及び地に立てる天使は、其手を擧げて天に向ひ、六無窮の世に生くる者、即天及び其中の者、地及び其中の者、海及び其中の者を造りし者を指して、誓ひて曰へり、此より復時無からん、七即第七の天使が籥を吹きて、聲を出さん日に、神の奧義は成就せられん、彼が其諸僕預言者に福音せしが如し。八我が天より聞きし聲、又我に語りて曰へり、往きて、海及び地に立てる天使の手に披きたる小巻を取れ。九我天使に往きて、彼に謂へり、小巻を我に與へよ。彼我に謂ふ、取りて之を食へ、此れ爾の腹を苦からしめん、然れども爾の口には、甜きこと蜜の如くならん。一〇我天使の手より小巻を取りて、之を食へり、此れ我が口に甜きこと蜜の如しなりしが、之を食ひし後、我が腹は苦くなれり。二彼我に謂ふ、爾復多くの民と、族と、音と、王との事を預言すべし。

第十一章 一杖に似たる萑葦を我に與へし者あり、曰く、起ちて、神の殿と、祭壇と其中に拜する者とを度れ、二然れども殿

の外の庭は、之を除きて、度る勿れ、蓋此れ異邦人等に與へられたり、彼等は聖なる城を躡すこと、四十二月ならん。三我は我が二の證者に與へん、彼等は麻の衣を衣て、預言すること、一千二百六十日ならん。四此れ乃二の橄欖樹及び二の燈臺にして、地の神の前に立つ所の者なり。五若し人彼等を害せんと欲せば、火は彼等の口より出でて彼等の敵を嚙まん、其人是くの如く殺さるべし。六彼等には、天を閉ぢて其預言する日に雨を地に降らせざる權あり、又水の上に權ありて、之を血に變ずるを得、且何の時に於ても、之を欲せば、凡の災を以て地を撃つを得るなり。七彼等が其證を畢へん時、淵より出づる獸は彼等と戰を爲し、彼等に勝ちて、彼等を殺さん。八其屍を大なる邑の衢に遺さん、此の邑は譬へてソドム及びエギペトと名づく、我等の主の十字架に釘せられし處なり。九諸民、諸族、諸音、諸國に屬する者は、三日半の間彼等の屍を見ん、且其屍を墓に藏むるを許さざらん。一〇地に居る者は之が爲に喜び、樂み、互に禮物を贈らん、蓋此の二の預言者は地に居る者を苦しめたり。二然れども三日半の後に、生命の神は神より彼等の中に入り、彼等は其足を以て立てり、而して大な

る懼は彼等を見る者に及べり。二三 彼等は天より彼等に言ふ、大なる聲を聞けり、曰く、之に升れ。乃雲に乗りて天に升れり、彼等の敵も之を見たり。二三 此の時大なる地震ありて、邑の十分の一は倒れ、地震に由りて殺されし者七千名あり、餘の者は懼を懷きて、光榮を天の神に歸せり。一四 第二の禍は去りて、視よ、第三の禍は速に來る。一五 第七の天使籬を吹きたるに、天に大なる聲ありて曰へり、世の國は我等の主及び其ハリストスの國と爲れり、彼は王と爲りて無窮の世に至らん。一六 神の前に己の寶座に坐する二十四の長老は俯伏して、神を拜して一七曰へり、主神全能者、今在り、先に在りし、後に在らんとする者よ、我等爾に感謝す、爾の大なる權能を執りて、王と爲りしに因る。一八 諸民は怒り、爾の怒も至り、又死者を審判して、爾の諸僕、即預言者、聖人、及び小大を論せず、爾の名を畏るる者に證を與へ、且地を壞る者を壞る時至れり。一九 乃神の殿は天に闢かれ、其殿の中に彼の約櫃は見れたり、又閃電と、衆くの聲と、迅雷と、地震と、大なる雹とありき。

第十二章 一 大なる異象は天に現れたり、日を衣たる婦あ

り月は其足下に在り、首には十二の星の冕を戴けり。二 彼孕み居りしが、産苦を病みて號べり。三 又他の異象は天に現れたり、視よ、大なる、赤き龍あり、之れに七の首、十の角ありて、其首に七の冕を戴けり。四 其尾は天の星の三分の一を曳きて、之を地に墮とせり。龍は産まんとする婦の前に立ち、彼が産む時に、其子を食はん爲なり。五 彼は男の子を生めり、此れ鐵の杖を以て萬民を牧せんとする者のなり、子は神及び其寶座に擧げられたり。六 婦は野に逃れたり、彼處に神より彼の爲に備へられたる處あり、彼が彼處に於て一千二百六十二年間食はん爲なり。七 天には戰起れり、ミハイル及び其天使等は龍と戰へり、龍及び其使等も亦戰ひしが、八 敵する能はずして、復天に彼等の處を得ざりき。九 大なる龍は墮されたり、即昔の蛇、惡魔及びサタナと名づくる者、全世界を惑はす者は地に墮され、其使等も彼と偕に墮されたり。一〇 我天に大なる聲あるを聞けり、曰く、今我等の神の救と、能と、國と、及び其ハリストスの權は至れり、蓋我等の兄弟の讒者、日夜我等の神の前に彼等を讒する者は墮されたり。一一 彼等は羔の地及び己の證の言を以て之に勝ち、死に至るまで己

の生命を愛まざりき。二 故に諸天及び之に居る者は樂しめ、地及び海に居る者は禍なる哉、蓋惡魔は爾等に降り、且大なる怒を懷けり、其時の幾くもなきを知るに因りてなり。一三 龍は己が地に墮されしを見て、男の子を生みし婦を逐へり。一四 婦には大なる驚の二の翼與へられたり、彼が野に飛び、己の處に至り、彼處に蛇の面を避けて、一期、數期、及び半期の間、食はれん爲なり。一五 蛇の婦の後に於て、其口より水の河の如くに吐きて、彼を漂はさんと欲せり。一六 然れども地は婦を助けたり、地は其口を啓きて、龍が己の口より出しし河を吞めり。一七 龍は婦を怒りて、彼の其餘の裔、即神の誠を守り、イイススハリストスの證を有つ者と戰はん爲に往けり。

第十三章 一 我海の沙に立ちて、海より獸の出づるを見たり、これに七の首、十の角あり、角に十の冕を戴き、其首に神の名を講る名を記せり。二 我が見し所の獸は豹に似たり、其足は熊の如く、其口は獅の口の如し、龍は彼に己の能、己の座及び大なる權を與へたり。三 我其首の一が傷を受けて、死せんとするが如きを見たり、此の死を致す傷愈えたれば、全地奇

として獸に従ひ、四 權を獸に與へし龍を拜し、且獸を拜して曰へり、誰か此の獸の如きある、誰か能く彼と戰はん。五 彼には誇大と謗讟と言ふ口は與へられ、又四十二月間行爲する權は與へられたり。六 彼は己の口を啓きて、神を讒り、其名其幕及び天に居る者を讒れり。七 且彼に聖徒と戰を爲して、彼等に勝つことは與へられ、又彼に諸族、諸民、諸音、諸國の上に權は與へられたり。八 凡そ地に居る者にして、世の始より屠られし羔の生命の書に名の録されざる者は、皆彼を拜せん。九 耳ある者は聽くべし。一〇 人を擄にする者は、己も亦擄にせられ、劍を以て殺す者は、己も亦劍を以て殺さるべし。此には聖徒の忍耐と信と在り。一一 我又他の獸の地より出づるを見たり、彼には羔に似たる二の角あり、其言ふこと龍の如し。一二 我は第一の獸の悉くの權を以て、其前に行爲し、地及び凡そ之に居る者をして、死を致す傷の愈えたる第一の獸を拜せしむ。一三 彼又大なる奇徴を行ひ、人人の前に於て火を天より地に降らしむるに至り、一四 且與へられし權に由りて、獸の前に行ふ所の奇徴を以て、地に居る者を惑はし、地に居る者に言ひて、劍の傷を受けて尚活ける獸の像を造らしむ。一五 又彼に獸の

像ざうに神しんを入いるる權けんは與あたへられたり、獸けものの像ざうを拜はいせざる者ものの殺ころざるるを至いたさん爲ためなり。一六 彼かれは衆人しゅうじんをして、小大せうだい、貧富ひんぷ、自じ主しゅ僕ぼくの別わかちなく、其右そのみぎの手て、或あるひは其額そのひたいに印誌しるしを受けしめ、一七 此この印誌しるし或あるひは獸けものの名な、或あるひは其名そのなの數かずあらざる者ものをして、買かふことをも、賣うることをも得えざらしめん。一八 此こに智慧ちえあり。智力ちりよくある者ものは獸けものの數かずを計はかるべし、蓋けだしこ此れ人の數かずなり。其數そのかずは六百六十六なり。

第十四章 一 我又われまた觀みしに、爰こゝに羔こひつじはシオン山ざんに立たち、彼かれと偕ともにする者もの一百四十四千あり、彼の父ちちの名なは彼等かれらの額ひたいに記しるされたり。二 且かつ我天われてんより聲こゑあるを聞きけり、多おほくの水の聲こゑの如ごとく、大なる雷いかづちの聲こゑの如ごとく、我又われまた琴ひを弾ひく者ものが其琴そのことを弾ひくが如ごとく聲こゑを聞きけり。三 彼等かれらは寶座ほうざの前まへ、及び四の生物いきものと長老等ちやうらうらとの前まへに、新あらたなる歌うたの如ごときを歌うたふ、此この歌うたは、地ちより贖あがなはれたる一百四十四千の者ものの外ほかに、誰たれも之これを學まなぶ能あたはざりき。四 此この衆しゅうは婦女をんなに玷けがれざる者ものなり、蓋けだしこ童貞どうてい者しやなり、彼等かれらは羔こひつじの何處いづこに往ゆくに論ろんなく、之これに従したがふ。彼等かれらは人ひとの中うちより贖あがなはれて、神かみと羔こひつじとに初實しよじつの果くわたるなり。五 彼等かれらの口くちには詭譎いつはりなし、彼等かれらは神かみの

寶座ほうざの前まへに責せむべきなし。六 我又われまた他の天使てんしが中天ちゆうてんに飛とぶを見みたり、彼かれは地ちに居をる者もの、諸國しよこく、諸族しよぞく、諸音しよおん、諸民しよみんに福音ふくいんせん爲ために、永遠えいゑんの福音ふくいんを有たもち、七 大なる聲こゑを以もつて言いへり、神かみを畏おそれて、光榮くわうえいを彼かれに歸きせよ、蓋けだしそのしんぼん其審判しんぱんの時とき至いたり、天てん、地ち、海うみ、及び水みづの泉いづみを造つくりし者ものを拜はいせよ。八 又また他の天使てんしには其後そのちに従したがひて言いへり、大なる邑まちワイロンは傾たふれたり、傾たふれたり、其淫亂そのいんらんの怒いかりの酒さけを萬民ばんみんに飲のましめたればなり。九 第三だいさんの天使てんしは彼等かれらの後に從したがひて、大なる聲こゑを以もつて言いへり、人若ひとし獸けものと其像そのざうとを拜はいし、其印誌そのしるしを己おのれの額ひたい、或あるひは己おのれの手に受うけば、一〇 神かみの怒いかりの酒さけ、即すなはちそのいかり其怒さかづきの杯さかづきに盛もりたる、雜まじりなき酒さけを飲のみ、又また聖なる天使てんし等ら及び羔こひつじの前まへに於おいて、火ひと硫磺ゆわうとを以もつて苦くるしめられん。一一 彼等かれらの苦くるしみの烟けむりは上のほりて、無窮むきゆうの世よに絶たえず、獸けものと其像そのざうとを拜はいして、其名そのなの印誌しるしを受うくる者ものは、日夜にちやあんそく安息あんそくを得えざらん。一二 此こには神かみの誠いましめとイイススを信しんずる信しんとを守まもる聖徒せいとの忍耐にんたい在あり。一三 我天われてんより我われに言いふ聲こゑを聞きけり、曰いはく、之これを書しるせ、今いまより後のち、主しゅに在ありて死しする死者ししやは福さいはひなり。神かみ曰いはく、然しかり、彼等かれらは其勞そのらうを休やめて、息いこはん、蓋けだしかれら彼等かれらの功わざは彼等かれらに隨したがはん。一四 我又われまた觀みしに、爰こゝに白しろき雲くもあり、雲くもの上うへに人ひとの子こに似にたる者もの坐ませり、其首そのかうべに金きんの

冕、其手に利き鎌あり。一五 又他の天使は殿より出でて、大なる聲を以て、雲に坐する者に呼びて曰へり、爾の鎌を遣して刈れ、蓋刈る時至れり、地の刈るべき者熟したればなり。一六 雲に坐する者其鎌を地に投げたれば、地は刈られたり。一七 又他の天使は、天に在る殿より出でたり、彼も利き鎌を持てり。一八 又他の天使、火に權ある者は、祭壇より出で、大なる聲を以て、利き鎌を持てる者に呼びて曰へり、爾の利き鎌を遣して、地の葡萄の房を剪れ、蓋其果は熟せり。一九 天使は其鎌を地に投げて、地の葡萄を剪り、之を神の怒の大なるに投じた。二〇 果はの中に在りて、城外に於て踐まれたれば、地はより出でて、馬の靱にまで至り、一千六百小里に及べり。

第十五章 一 我又他の大にして奇妙なる異象を天に見たり、七の天使は七の末時の菑を持てり、神の怒の此を以て終る所の者なり。二 我は玻璃の海の、火と間りたるが如きを見、且獸と、其像と其印誌と、其名の數とに勝ちたる者が、此の玻璃の海に立ちて、神の琴を執れるを見たり。三 彼等は神の僕モイセイの歌、及び羔の歌を歌ひて曰ふ、主神全能者よ、爾の所爲

は大なる哉、奇妙なる哉、諸聖の王よ、爾の道は義なる哉、誠なる哉。四 主よ、誰か爾を畏れざらん、爾の名を讚榮せざらん、蓋爾は獨聖なり、萬民來りて爾の前に拜せん、爾の義判顯れたればなり。五 此の後我觀しに、爰に天に於て證詞の幕のの殿は開けたり。六 七の菑を持てる七の天使は殿より出でたり、潔くして光れる泉の衣を衣、胸に金の帶を束ねたり。七 四の生物の一は七の天使に、無窮の世に生くる神の怒を満てたる七の金の鼎を與へたり。八 殿は神の光榮と其能力とに由りて烟に満てられたり、七の天使の七の菑の畢るに至るまでは、誰も殿に入る能はざりき。

第十六章 一 我殿より七の天使に言ふ大なる聲を聞けり、曰く、往きて、神の怒の七の鼎を地に傾けよ。二 第一の天使往きて、其鼎を地に傾けたれば、毒惡にして苦痛なる瘍は、獸の印誌ありて其像を拜する人人に生じたり。三 第二の天使其鼎を海に傾けたれば、海は死人の血の如くに爲りて、海中の生物皆死せり。四 第三の天使、其鼎を河及び水の泉に傾けたれば、乃血と爲れり。五 我水の天使の言ふを聞けり、曰く、今在

り、及び先に在りし主よ、爾は此くの如く審判せしを以て、義なり、聖なり。六 彼等は諸聖と諸預言者との血を流ししに因りて、爾は彼等に血を與へて飲ましめたり、蓋彼等は之に當れり。七 我又他の者の祭壇より言ふを聞けり、曰く、然り、主神全能者よ、爾の審判は誠なる哉、義なる哉、八 第四の天使其鼎を日に傾けたれば、此に火を以て人人を焚く權は與へられたり。九 人人は大なる熱に焚かれて、此等の菑に權ある神の名を讒り悔改せずして、光榮を彼に歸せざりき。一〇 第五の天使其鼎を獸の座に傾けたれば、其國暗くなりて、人人苦に因りて其舌を齧み、二 且其苦と瘍とに因りて天の神を讒り、己の所爲を悔改せざりき。三 第六の天使其鼎を大なる河エフラトに傾けたれば、其水は涸れたり、東方の諸王の道を備へん爲なり。三 我は龍の口と、獸の口と、僞預言者の口より、蛙に似たる三の不潔なる神の出づるを見たり。四 此は魔鬼の神にして、奇徴を行ふ者なり、彼等は出でて全地の諸王に就く、之を神全能者の彼の大なる日の戦に集めん爲なり。五 見よ、我盗の如くに来る、儼醒して其衣を守り、裸にして行かず、其差を見ざらしむる者は福なり。一六 乃彼等をエウレイの

言にてアルマゲドンと名づくる處に集めたり。一七 第七の天使其鼎を空氣に傾けたれば、天の殿より、寶座より、大なる聲出でて曰く、成れり。一八 乃閃電と、迅雷と、衆くの聲と作り、又大なる地震ありき、人の地にありしより、以來未だ有らざりし者なり、是くの如き地震、斯く大なる者なり。一九 大なる邑は裂けて三と爲り、異邦の諸の邑は傾れたり、大なるワイロンは神の前に記念せられたり、之に彼の烈しき怒の酒杯を與へん爲なり。二〇 凡の嶋は奔り、諸山は見えずなれり。二一 又大なること鈞の如き雹は、天より人人に降りたり、人人雹の菑に因りて、神を讒り、其菑甚大なればなり。

第十七章 一七の鼎を持てる七の天使の一は來り、我と與に語りて、我に謂へり、來れ我爾に多くの水に坐する大なる淫婦の審判を示さん。二 地の諸王は彼と淫し地に居る者は其淫亂の酒に酔ひたり。三 乃我を神に於て野に攜へたれば、我絳き獸に坐する婦を見たり、獸は神を讒る名に滿てられ、七の首、十の角あり。四 婦は紫布と絳布とを衣、金と寶石と真珠

とを妝よそひて、其手そのてに憎にくむべき者ものと其淫亂そのいんらんの穢けがれとを滿みつる金の杯さかづきを執とり、五 其額そのひたいに名なの記しるせるあり、曰いはく奧義あうぎ、大なるワウイロン、地の諸淫婦しよいんぶ及び憎にくむべき者の母ははと。六 我婦われなんぢが諸聖しよせいの血ちとイイススの證者しやうしやの血ちとに醉ゑへるを見たり、彼かれを見て、大に驚おどろき奇あやしめり。七 天使てんし我われに謂いへり、何ぞ奇あやしむ、我爾われなんぢに此の婦をんな、及び彼かれを乗のする獸けもの、七の首かうべ、十の角つある者の奧義あうぎを語つげん。八 爾なんぢが見みたる獸けものは、先に在あり、又無またなし、後淵のちふちより上のほり、又沈淪またほろびに往ゆかん、地に居をる者ものにして、世よの始はじめより其名そのなの生命せいめいの書しよに録しるされざる者ものは、獸けものが先さきに在あり、又無またなく、後復のちまたい出いづるを見みて、奇あやしまん。九 此こには智ちなる意義いぎあり。七の首かうべは婦をんなの坐ざする所ところの七の山やまなり。一〇 又七の王わうなり、其五そのごは己すに傾たふれ、其一是尚在なほあり、餘よの一いつは未いまだ來きたらず、來きたらば、暫しばらく存ぞんすべし。一一 先在さきに在あり、又無またなき獸けものは、其第八そのだいはちなり、七より出いでて、沈淪ほろびに往ゆかん。一二 爾なんぢが見みたる、十の角つは、十の王わうなり、未いまだ國くにを受けざれども、一時獸いちじけものと偕ともに王わうの如ごとき權けんを受けん。一三 彼等かれらは旨むねを一いつにして、己おのれの能ちからと權けんとを獸けものに與あたへん。一四 彼等かれらは羔こひつじと戰たたかひ、羔こひつじは彼等かれらに勝かたん、蓋けだし彼は諸主しよしゆの主しゆ、諸王しよわうの王わうなり、彼かれと偕ともにする者ものは、召めされ、選えらばれたる、忠信ちゆうしんなる者ものなり。一五 又我

に謂いふ、爾なんぢが見みたる諸水しよすゐ、淫婦いんぶが坐ざする所ところの者ものは、諸民しよみん、群衆ぐんじゆう、諸國しよこく、諸音しよおんなり。一六 爾なんぢが獸けものに於おいて見みたる十の角つは、淫婦いんぶを惡にくみ、之これを荒あらし、之これを裸はだかにし、其肉そのにくを食くらひ、火ひを以もつて之これを焚やかん。一七 蓋けだしかみ神おのれは己おのれの旨むねを行おこなふことを彼等かれらの心こころに納いれて、彼等かれらに其旨そのむねを一いつにし、其國そのくにを獸けものに與あたへて、神かみの言ことばの成じやうじゆ就じゆせんことを待またしめたり。一八 爾なんぢが見みたる婦をんなは、地の諸王しよわうに王わうたる大なる邑まちなり。

第十八章 一 此この後のち、我又われまた他の天使てんしの天てんより降くだり、大なる權けんを乗とれるを見たり、地ちは其光榮そのくわうえいに由よりて照てらされたり。二 彼は厲はげしく呼よび、大なる聲こゑを以もつて言いへり、大なるワウイロンは傾たふれたり、傾たふれたり、魔鬼まきの居處すまひ、凡およその不潔ふけつにして憎にくむべき鳥とりの巢すと爲なれり。三 蓋けだし彼は萬國ばんこくに其淫亂そのいんらんの怒いかりの酒さけを飲のましめたり、地ちの諸王しよわうは彼かれと淫いんし、地ちの諸商しよしやうは彼かれが奢華おごりの甚はなはだしきに因よりて富とを獲えたり。四 我又われまた天てんより他の聲こゑを聞きけり、曰いはく、我が民たみよ、爾等なんぢら彼のかれの中うちより出いてよ、其罪そのつみに與あつかず、其災そのわざはひを受けざらん爲ためなり。五 蓋けだし其罪そのつみは天てんにまで滔はびこり、神かみは其不義そのふぎを憶おもひ起おこせり。六 彼かれが爾等なんぢらに與あたへし如ごとく、彼かれに與あたへ、其行そのおこなひに依

りて、倍して彼に報い、其斟みたる杯に、倍して彼の爲に斟め。七 彼が自ら榮え、自ら奢れる度に適ひて、彼に苦と哀とを與へよ。蓋彼は其心の中に言ふ、我女王の位に坐す、我嫠に非ず、哀を見ざらんと。八 故に一日の間に其災に至らん、即死、哀、饑饉なり、彼且火を以て焚かれん、蓋彼を審判する主神は大能あるなり。九 彼と淫し、彼と與に奢りたる地の諸王は、彼が焚かるる烟を見る時、彼の爲に哭き號び、一〇 彼の苦を畏るるに由りて、遠く立ちて曰はん、禍なる哉、禍なる哉、大なる邑ワイロン、堅固なる邑よ、蓋一時の間に爾の審判は至れり。二 地の諸商も彼の爲に哭き哀しまん、蓋復彼等の貨物を買ふ者なし。三 其貨物は金、銀、寶石、真珠、細布、紫布、絹、絳布、凡の香木、象牙の諸器、佳木、銅鐵鑽石の諸器、一三 肉桂、香品、香膏、乳香、酒、油、麵、麥、牛、羊、馬、車及び人の身靈なり。一四 爾の靈の嗜める果實は爾に離れ、凡の珍奇華美の物は爾に離れたり、爾復之を見ざらん。一五 此等の諸商、彼に由りて富を獲たる者は、彼の苦を畏るるに由りて、遠く立ち、哭き哀しみて、一六 曰はん、禍なる哉、禍なる哉、細布と紫布と絳布とを衣、金と寶石と真珠とを飾りた

る大なる邑よ、蓋一時の間に是くの如き富は滅びたり。一七 凡の舟長と、凡の舟に乗れる者と、凡の船人と凡そ海に貿易する者とは遠く立ち、一八 彼が焚かるる烟を見て、號びて曰へり、何の邑か此の大なる邑に似るを得ん。一九 又其首に塵を蒙りて、哭き、哀しみて、號びて曰へり、禍なる哉、禍なる哉、爾大なる邑、凡そ海に舟を有つ者が、彼の奢華に由りて、富を獲たる者よ、蓋一時の間に彼は荒墟と爲れり。二〇 天及び聖使徒、預言者よ、之が爲に樂しめ、蓋神は爾の審判を彼に行へり。二一 又一の有能なる天使は大なる磨の如き石を取り、海に投じて曰へり、ワイロン、大なる邑は、斯く烈しく傾されて、復之を見るを得ざらん。二二 琴を弾き、歌を歌ひ、簫を品べ、箏を吹く者の聲は、復爾の中に聞えざらん、凡の工藝者凡の工藝は、復爾の中に見えざらん、磨の聲は、復爾の中に聞えざらん、三 燈の光は、復爾の中に照らざらん、新娶者と新婦との聲は、復爾の中に聞えざらん、蓋爾の諸商は地の候伯と爲れり、爾の魔術に由りて萬國は惑はされたり。二四 彼の中に、諸預言者、諸聖人、及び凡そ地に於て殺されたる者の血は見られたり。

第十九章 一此の後、我多くの民の呼ぶが如き大なる聲の天に在るを聞けり、曰く、「ア ril イヤ」、救贖と、光榮と、尊貴と、權能とは、我等の主しゆに歸す。二蓋其審判は誠なり、義なり、蓋彼は淫亂を以て地を敗壞せし大なる淫婦を定罪し、己の諸僕の血を其手より索めたり。三再言へり、「ア ril イヤ」。彼の烟は上りて、無窮の世に息まず。四又二十四の長老及び四の生物は俯伏し、寶座に坐する神を拜して曰へり、「アミン」、「ア ril イヤ」。五聲寶座より出でて曰へり、悉くの神の僕、及び彼を畏るる小なる者と大なる者よ、我等の神を讚美せよ。六我多くの民の聲の如く、多くの水の聲の如く、烈しき雷の聲の如きを聞けり、曰く、「ア ril イヤ」、蓋主神全能者は王と爲れり。七我等は喜び樂しみて、光榮を彼に歸すべし、蓋羔の婚姻は届り、其婦は己を備へたり。八彼に潔くして光れる細布を衣きることは與へられたり、細布とは諸聖の義なり。九天使我に言へり、之を書せ、羔の婚姻の筵に召されたる者は福なり、又曰へり、是れ神の眞の言なり。一〇我其足下に俯伏して、彼を拜せんとせしに、彼我に言へり、不可なり、我は爾と

イイススの證を有つ爾の兄弟との同僚なり、神を拜せよ、蓋イイススの證は預言の神なり。二我天の開けたるを見たり、爰に白き馬あり、之に乗れる者は、忠信及び眞實なる者と稱へられ、義を以て審判を行ひ、及び戰を爲すなり。三其目は火燄の如く、其首には冕を戴けり、彼は録されたる名を有てり、彼の外此れを識る者なし。四彼は血に染みたる衣を衣たり、彼の名は神の言と稱へらる。五彼の軍は咬くして潔き細布を衣、白き馬に乗りて、彼に順へり。六彼の口より利き劍出づ、之を以て諸民を撃たん爲なり。彼は鐵の杖を以て彼等を牧せん、彼は神全能者の憤と怒との酒を踐む。七彼の衣と股とに名を書されたるあり、曰く、諸王の王、諸主の主と。八我一の天使の日に立てるを見たり、彼は大なる聲を以て、中天に飛ぶ、凡の鳥に呼びて曰へり、來りて、神の大なる筵に集れ、一八諸王の肉、千夫長の肉、勇士の肉、馬と之に乗る者との肉、凡の自主と奴僕と、小なる者と大なる者との肉を食はん爲なり。一九我獸と、地の諸王と、彼等の軍とが、馬に乗れる者及び其軍と戰はん爲に集りたるを見たり。二〇獸及び彼と偕に偽預言者、即曾て彼の前に奇徴を行ひ、之を以て獸

の印誌を受けて、其像を拜する者を惑はしし者は執はれたり、斯の二者は生きながら、硫磺を以て燃ゆる火の池に投ぜられたり。三 其餘の者は馬に乗れる者の口より出づる劍を以て殺されたり、凡の鳥は彼等の肉に飽きたり。

第二十章 一 我天使の天より降るを見たり、其手に淵の鑰と大なる鍵とを持てり。二 彼は龍、昔の蛇、即 惡魔及びサタナなる者を執へて、之を一千年の爲に縛り、三之を淵に投げ、之を閉ぢて、其上に封印せり、一千年の終るに至るまで、復諸民を惑はさざらん爲なり、其後彼は暫時の間放たるべし。四 我列座及び之に坐する者を見たり、彼等に審判の權は與へられたり、我又イイススの證及び神の言の爲に斬られたる者、即 獸と其像とを拜せず、己の額及び己の手に印誌を受けざりし者の靈を見たり。彼等は生きて、一千年の間ハリストスと共に王たりき。五 餘の死者は一千年の終るに至るまで生きざりき。此れ第一の復活なり。六 第一の復活に分ある者は福なり、聖なり、第二の死は彼等の上に權を有たず、乃 彼等は神及びハリストスの司祭と爲りて、彼と偕に一千年の間王たらん。

七 一千年の終るに及びて、サタナは、其牢獄より釋かれ、出でて、地の四極の諸民、ゴグ及びマゴグを惑はして、之を戰の爲に集めん。其數は海の沙の如し。八 彼等は地の廣き處に上りて、諸聖の陣營と愛せらるる城とを圍みたるに、九 火は神より天より降りて、彼等を嚙みたり。一〇 彼等を惑はしし惡魔は火と硫磺との池に投ぜられたり、即 獸と偽預言者との在る所なり、彼に於て彼等は日夜苦しみて、無窮の世に熄まざらん。二 我大なる咬き寶座、及び之に坐する者を見たり、天と地とは彼の顔より遁れて、其所を得ざりき。三 我死者の小なる者及び大なる者が神の前に立てるを見たり、諸書は披かれ、又他の書、即 生命の書なる者は披かれたり、死者は此等の書に録されたることにより、其行に循ひて、審判を受けたり。三 海は其中の死者を出し、死と地獄とは亦其内の死者を出せり、各其行に循ひて審判を受けたり。一四 死も地獄も火の池に投ぜられたり、此れ第二の死なり。一五 凡そ生命の書に録されざりし者も火の池に投ぜられたり。

第二十一章 一 我新なる天及び新なる地を見たり、蓋先の

天及び先の地は逝れり、海も亦有るなし。二 又我イオアンは聖なる城、新なるイエルサリムが、其夫の爲に飾られたる新婦の如く預備せられて、神より天より降るを見たり、三 我大なる聲の天より言ふを聞けり、曰く、視よ、神の幕は人人と偕に在り、彼は彼等と偕に居らん、彼等は彼の民と爲り、神は親ら彼等と偕に在りて、彼等の神と爲らん。四 神は彼等の目より凡の涙を拭はん、死は復有らざらん、悲哀も、號泣も、疾痛も、復有らざらん、蓋前の事は逝れり。五 寶座に坐する者は曰へり、視よ、我一切新なるを造る。六 又我に言ふ、之を書せ、蓋此の言は眞實にして、信すべきなり。彼我に言へり、成れり、我は「アリファ」及び「ラメガ」、始及び終なり、渴く者には、我價なくして生命の水の泉より飲ましめん。七 勝つ者は一切を嗣がん、我彼の神と爲り、彼は我の子と爲らん。八 然れども臆する者、信ぜざる者、憎むべき者、人を殺す者、淫行の者、魔術を行ふ者、偶像を拜する者、凡そ 謊を言ふ者の分は、火と硫磺とを以て燃ゆる池に在り、此れ第二の死なり。九 七の末時の 菑を滿つる七の鼎を持ちし七の天使の一、我に就きて曰へり、來れ、我爾に新婦、即 羔の妻を示さん。一〇 乃我を神に於

て大なる高き山に攜へて、我に大なる城、聖なるイエルサリム、天より神より降る者を示せり。二 城には神の光榮あり。其光は至りて寶なる石に似、透明なる碧玉の如し。三 此に大なる高き垣あり、十二の門あり、門には十二の天使あり、又名の書されたるあり、即 イズライリの諸子の十二の支派の名なり。一三 東に三門、北に三門、南に三門、西に三門あり。一四 城の垣には十二の基址あり、其上に 羔の十二の使徒の名あり。一五 我と語れる者は金の竿を持てり、城と其門と其垣とを度らん爲なり。一六 城は四方にして、其長さは、其濶と異なるなし。彼竿を以て城を度りて、十二千小里を得たり。其長さと、濶と、高さ、相等し。一七 又垣を度りしに、一百四十四尺を得たり、是れ人の度、亦天使の度なり。一八 垣の締構は碧玉なり、城は純金にして、淨き玻璃の如し。一九 城の垣の基址は、諸の寶石を以て飾れり。二〇 第一の基址は碧玉、第二は青玉、第三は蒼玉、第四は葱珩、第五は雜紅玉、第六は瑪瑙、第七は黃玉、第八は綠玉、第九は淡黃玉、第十は翡翠、第十一は赤玉、第十二は紫玉。三十二の門は十二の真珠なり、一の真珠は一の門を爲せり、城の衢は純金にして、透明なる玻璃の如し。

二三 我其中に殿を見ざりき、蓋主神全能者、及び羔は其殿なり。二三 城は日月の之を照すを需めず、蓋神の光榮は之を照し、且羔は其燈なり。二四 救はれたる諸民は其光の中に歩み、地の諸王は己の光榮と尊貴とを其中に攜へん。二五 其門は終日閉ぢず、夜は彼處に無からん。二六 諸民の光榮と尊貴とは其中に攜へられん。二七 凡の不潔、及び憎むべきことと、謊とを行ふ者は、其中に入るを得ず、唯羔の生命の書に録されたる者は入らん。

第二十二章 一 彼は我に生命の水の清き河を示せり、澄めること水晶の如し、神及び羔の寶座より出づ。二 其衢の中及び河の左右に生命の樹あり、果を結ぶ事十二次、月毎に其果を出す、樹の葉は諸民を醫すが爲なり。三 凡の呪詛は復有らざらん、神及び羔の寶座は其中に在らん、彼の諸僕は彼に奉事し、四 彼の顔を見、彼の名は其額に在らん。五 夜は彼に無からん、燈と日の光とを需めず、蓋主神は彼等を照す、彼等は無窮の世に王たらん。六 又我に言へり、是の言は信すべくして、眞實なり、聖なる諸預言者の主神は、速に成るべきことを其諸僕

に示さん爲に、其天使を遣せり。七 視よ、我速に來る、斯くの書の預言の言を守る者は福なり。八 我イオアンは此等の事を見、且聞けり、我は聞き且見し時、彼等の事を我に示せる天使の足下に俯伏して、拜せんとせしに、九 彼我に言へり、不可なり、蓋我は爾と、爾の兄弟諸預言者と、斯の書の言を守る者との同僚なり。神を拜せよ。一〇 又我に言へり、斯の書の預言の言を封ずる勿れ、蓋時は近し。一一 不義なる者は仍不義を爲すべし、汚穢なる者は仍汚穢を爲すべし、義なる者は仍義を爲すべし、聖なる者は仍聖にせらるべし。一二 視よ、我速に來る、我的報は我と偕に在り、各人に其行に依りて報いん爲なり。一三 我は「アリア」及び「ラメガ」、始及び終、第一の者及び末の者なり。一四 生命の樹に權を得、及び門より城に入らん爲に、彼の誠を守る者は福なり。一五 犬と、魔術者と、淫亂者と、兇殺者と、拜偶像者と、凡そ謊を好みて、之を行ふ者とは外に在り。一六 我イイススは我が天使を遣せり、之を爾等に諸教會に證せん爲なり。我はダワイドの根、及び苗裔なり、光れる晨の星なり。一七 神と新婦とは曰ふ、來れ、聞く者も曰ふべし、來れ。渴く者は來るべし、望む者は價なくして生命の水

を取るべし。一八 我亦凡そ斯くの書の預言の言を聞く者に證す、若し之に加ふる者あらば、神は斯の書に録されたる苗を以て彼に加へん。一九 若し斯の預言の書の言を削る者あらば、神は彼に生命の書と、聖なる城と、斯の書に録されたる事とに與る分を削らん。二〇 此を證する者は曰ふ、然り、我速に來る、「アミン」。然り主イエスよ、來れ。願はくは我等の主イエススハリストスの恩寵は爾等衆と偕に在らんことを、「アミン」。